

はじめに

本調査研究の目的

各校では、図1にあるように子どもたちの資質・能力の確かな育成のため、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善、そこにつなげる「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を大切にした実践がなされている。それに関連して近年は特に、個別最適な学びを支えるための、単元内自由進度学習の実践が県内各地で増えてきていると実感している。一方、先生方からは、「私たちの単元内自由進度学習は本当に子どもたちの資質・能力の育成につながっているのだろうか」と心配する声も聴かれる。そこで、本調査研究は、継続的に単元内自由進度学習に取り組んでいる学校の実践を基に、どのような単元内自由進度学習が子どもの資質・能力の育成につながるのか、子どもと教師の変容と併せて考察することを目的とする。

学習指導要領に示された目標や内容の実現
資質・能力の確かな育成

「主体的・対話的で深い学び」
の視点からの授業改善

「個別最適な学び」と「協働的な学び」の
一体的な充実

図1「令和の日本型学校教育」の構築を目指して（答申）
を基に作成

松本市立寿小学校の単元内自由進度学習の学びの姿

松本市立寿小学校（以下、寿小）は、松本市のリーディングスクールとして、県外視察やそれを基にした単元内自由進度学習の実践を昨年度から行ってきた。今年度はその成果を生かして、全学年で単元内自由進度学習の実践に取り組んでおり、私たちはその公開研究会で授業を参観させていただいた。1年生は互いの進度を必要以上に意識することがないように、また、児童の自己決定の幅を広げることができるよう、算数科「形づくり」と生活科「リースづくり」の2教科並行型の授業が行われていた。その授業の様子や子どもの学びの姿を紹介する。

Aさんの学びの姿

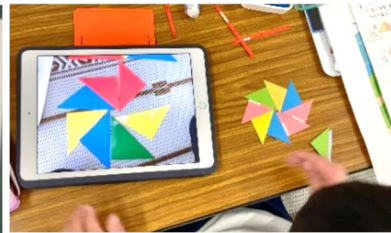
この日の授業は全8時間中4時間目。Aさんは前時に続き、この日も算数を学習する計画を立てた。Aさんはまず、棒並べから学習を進めた。課題として提示された絵を見ながら、それをよく見て同じ形を並べ、できあがった形をタブレットで撮影し、記録をした（写真①）。その際に、Aさんは前時に記録した7枚の色板で作った風車のような形の写真が目に入ったのか、それを開き、壁の掲示（写真②）と見比べながら、「なんか変だな」とつぶやくと、形づくりに使われている板の数を数え、タブレットの横に8枚の色板で正しい風車の形を作った（写真③）。風車の形を作ると、担任の先生に、「やりたいことはだいたいできたよ！」と報告すると、今度は、ヨットや魚の形が何枚の色板で作られているのかを答えるプリントに取りかかり、自分で答え合わせをしていた（写真④）。終わりの時間が近付くと、満足気な表情を浮かべたAさんが教室に帰ってきた。そして、「いっぱいプリントをかくじかんがあつてうれしかった」と自分の学習を振り返り、本時の授業を終えた。



写真①



写真②



写真③



写真④

Aさんをはじめとした子どもたちは、2教科並行型の単元構成や、教材や教具などの環境構成（写真⑤）によって、ガイダンスを基にしながら立てた自分の計画に沿って、学び進めていた。これは、単に一方向だけに学習が進むのではなく、自分がやりたい課題に戻ることができたり、自分が納得いくまでじっくりと一つの課題に取り組むことができたりと、取り組む内容や方法、時間、場所を自己決定し、自分自身で学びを最適化する機会が保証されていたことが理由の一つであろう。そして、その結果として、子どもたちには粘り強く学習に取り組んだり、自分で学習を調整しようとしたりする姿が見られた。また、Aさんの学びの姿や表情、学習カードの記述は「身の回りにあるものの形に親しみ、算数で学ぶことのよさや楽しさを感じながら学ぼうとしている」姿として捉えることができる。今後、発展課題に取り組む等、学びを広げたり深めたりすることで、寿小の研究課題である「主体性を高める授業」に更につながっていくと考えられる。



写真⑤

資質・能力が育成される単元内自由進度学習のための寿小の手立て

ここで、Aさんが前述のように学ぶことができた背景にある手立てについて考えてみたい。

寿小の研究会では、下の図2のように、どのように単元内自由進度学習の準備をするのか、研究主任より①～⑦の項目が示された。それぞれの項目については、次のような意図があると考える。

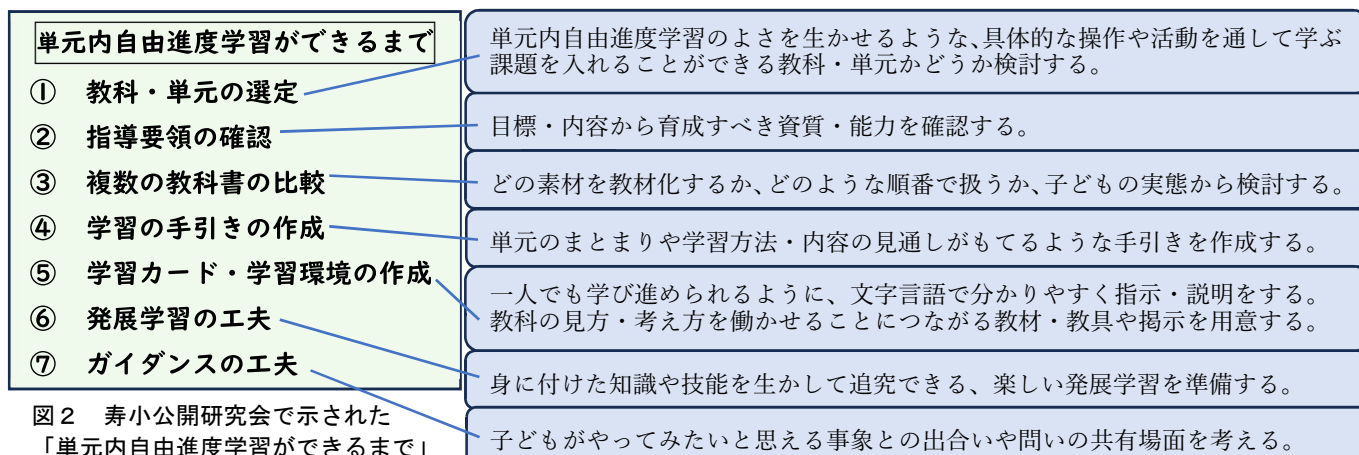


図2 寿小公開研究会で示された「単元内自由進度学習ができるまで」

寿小の研究成果から、子どもが主体的に取組み、資質・能力が育成される単元内自由進度学習を構想していくためには、何をどのように指導・評価するのか、何より子どもがどのように学びを進めていくのかについて明確にしながら必要な手立てを講じていくことが大切である。

単元内自由進度学習の実践を通した子どもと教師の変容

資質・能力が育成されていくと、教師や子どもにはどのような変容が見られるのか。先生方に、次の2点について質問をし、得られた回答をボックス内に記述する。



単元内自由進度学習に取り組む中で、先生ご自身にどのような変容がありましたか？

- ・授業の「準備」の大切さを改めて感じ、また、こちらが必要以上に指導せずとも、子ども自身に学ぶ力(学びたい気持ち)があることを再認識した。
- ・教材研究を単元のまとまりで行うようになり、より一層その教科の内容や目標、見方・考え方を確認するようになった。



単元内自由進度学習に取り組む中で、児童にどのような変容が見られましたか？

- ・教師に頼らず、自分の計画に沿って、学習に取り組もうとするようになった。
- ・どれぐらい課題に時間がかかりそうか、見通しを持てるようになってきた。また、時間が足りないときには子どもの方から「後〇分ください」と言うようになった。
- ・学習面・生活面において、主体的に取り組む姿が多く見られるようになったと感じる。

この回答から、寿小の先生方が単元内自由進度学習の実践を通して、子ども自身の学ぼうとする力を信じて子どもに学びを委ねることや、単元や題材など、内容や時間のまとまりを見通して授業づくりをすることの大切さを実感していることが読み取れる。これは、単元内自由進度学習に限らず、どのような授業づくりにおいても重要なことではないだろうか。また、子どもたちの変容に目を向けても、単元内自由進度学習の中での育ちが、学習の場面で自らの学習を調整しようとする姿の現れだけでなく、生活の場面においても主体的に取り組もうとする姿にもつながっていることが伺える。

おわりに

本稿では、松本市立寿小学校の実践から、資質・能力の育成につながる単元内自由進度学習のあり方についての一考察をお示しさせていただいた。本稿で示した単元内自由進度学習は、個別最適な学びを実現するための授業づくりの一つであり、それが全てではない。大切なことは、各学校の子どもたちや先生方の実態や強みを生かして、授業改善の目的である資質・能力の育成に向けて、それらが育成された子どもの姿を具体的に示して授業改善を進めていくことである。また、授業改善の内容や方向を教職員同士で検討・共有するだけでなく、子どもたちが自らの学び振り返り、調整することにつながるように、子どもたちとも共有したい。

「個別最適な学び」が着実に実現されることによって育成された資質・能力が「協働的な学び」の中でどのように発揮され、どのように育成されていくのかといった「一体的な充実」のあり方については、今後の研究課題としたい。